2020～2021年度　国際ロータリーのテーマ
ホルガー・クナーク

ロータリーは機会の扉を開く

RI第2510地区
留萌ロータリークラブ

会　報

2020►2021
WEEKLY REPORT

留萌ロータリークラブ
会長目標

**60年の歴史に敬意と感謝を
そして、これから100年に
向けての礎を築こう！**

会長／辻本　哲也　　幹事／燕　美雪

プログラム　（第20号・第21号）合併号

●本日
来賓卓話「職業奉仕と見返りを求めない寄付」
（宗）日本聖公会 北海道教区
司祭（牧師）留萌キリスト教会　木村　夕子 師

●次週予定
－法定休会－

会員誕生日
青　山　貴　幸
村　松　博　士

結婚記念日
燕　　美　雪
松　本　光　浩

No. 2885
第20回　3月10日

出席報告

前例会

会員総数	26名
出免会員	3名
出免出席	3名
基準会員出席	16名
出席率	73.08%

前々会　第18回　2月17日

欠席会員	7名
内メイクアップ	0名
修正出席率	73.08%

例会／毎週水曜　12:15～13:15　留萌産業会館2F

会長報告

1．２月19日産業会館議員会議室にて第９回定例理事役員会を開催致しました。３月４月のプログラムの承認、夜間例会の自粛、会計報告の承認を行いました。
　また、地区大会の参加は会長幹事、次年度会長幹事、次年度ガバナー補佐の５名の参加と一般会員のオンライン参加で対応する事を確認致しました。

2．残念なお知らせです。妹背牛ロータリークラブが今年度６月をもちまして、解散するとの連絡がありました。妹背牛クラブは深川クラブをホストクラブとして昭和42年１月18日誕生し、54年間の活動をして参りました。大変残念ですが、皆様にお知らせいたします。

幹事報告

• 地区大会に関するアンケートのご協力ありがとうございました。登録に関する手続きが終了いたしましたのでご報告致します。

ニコニコBOX

• 嘉門さん、ようこそ留萌ロータリークラブへ。本日はよろしくお願いします。　辻本会長
• 嘉門さん、お越し頂きありがとうございます。本日はよろしくお願いします。　燕幹事
• 嘉門さん、ようこそ留萌クラブへ。本日の卓話よろしくお願い致します。　関野会員
• 今日の卓話楽しみです。　福士会員

前　回	365,000円
今　回	6,000円
累　計	371,000円

第19回　３月３日（水）　天候／晴

プログラム

来賓卓話「新規就農について」

嘉門　宏美 様

本日は伝統ある留萌ロータリークラブにお招きいただき誠にありがとうございます。

自己紹介させていただきますと、私は現在38歳、増毛に移住して６年目になります。今まで色々な事にチャレンジしまして、昨年度2020年に増毛町別苅地区にて新規就農させていただきました。お米農家としてデビューしました。なかなか道のりが長く、もどかしい日々を過ごしましたが、初めて「嘉門宏美のお米です」と言えるお米が誕生致しました。

私は札幌出身で、高校卒業後アメリカに留学を致しました。“海外でも活躍できる人間になりたい”との思いからアメリカに飛び出しました。帰国後に起業という文化に興味を持ちまして、友人が起業したいという事で友人の会社を手伝いながら海外進出のお手伝いをして、インターネットで出来る事を模索して東京で過ごし、その後脱都会という事で東京を離れ、日本各地を放浪する時期を経て、ここは「暮らし」だろういう事で、私自身の自然に回帰と言うか、自然の中で暮らしていく事が色々な意味での解決方法であり表現あり、やって行きたい事という事で、自然暮らしを学び、その場所をどこにしようかとたどり着いたのが増毛町でございました。地域おこし協力隊などの活動を経て農家デビューとなりました。

色々な所に行ってきましたが、節目節目で大変な出来事が起こりました。アメリカへ渡って早々９.11、ニューヨークでのテロが起こり、ＵＣＬＡ卒業前後にリーマンショックがあり、就職うんぬんという事もあったのですが、大企業も信用できないとの思いがあり、東京へ帰って来てからインターネットで起業だと思っておりましたが、その時に３.11の東日本大震災が起こり、お金を持っていてもどうにもならないとの思いもあり、短期間ではありましたが東京そのものがマヒし、あらゆるものがマヒする現実があり、今現在のコロナ問題もあり、自然災害もあり、これからどう生きていこうか、死生観というか生きている間の時間をどのように過ごしていこうかという事を節目節目で感じさせられて今現在に至ります。

大学はＵＣＬＡで、国際開発学を勉強しておりました。まさにグローバルリズムというものが大東して来て、グローバル社会で何ができるかという事を勉強してきたのですが、この時に、果たしてグローバルというものが世の中にとって良いのかという事に疑問を抱き、開発という物が果たして何なのかという事にも疑問を持ったりもしまして、大きな国際組織に入っても世の中を変える事が20～30代では出来そうもないと感じて、小さなスケールで起業という所に興味を持ちました。当時アメリカでは、マイクロソフトのビル・ゲイツであったり、アップルのスティーブ・ジョブズ等が注目されておりましたが、フェイスブックのマーク・ザッカーバーグであったり、日本ではホリエモンなどがそうですが、若い世代が色々な事業によって問題を解決したり、楽しくする、便利にするという活動をされていて、そのような事に興味を持ち、東京でインターネットというドメインで勉強しておりました。当時は“海外へ進出して行こう”という事で、私自身は香港へ行ったり、台湾へ行ったり、ベトナムへ行ったりと、海外展開という所をインターネットで行ける事を勉強しながら事業を手伝っておりました。

ふと休暇の時に、“ヒマラヤにトレッキング行こうか”“四国へ行こうか”の二択の中で、友達は“どちらも行った事が無いが四国が絶対良い”という事で行く事にしました。その時に何が幸せか？何が自由か？という事に関して、今までは東京であったり、ビジネスの中での成功で見出していけると思っていたのが、色々違う感覚を覚えさせていただきました。東北大震災の時に、今まで東京で何か出来るだろうと思っていた成功プランが何だかおかしいと感じ始め、これはあまり強く無いなという所を感じてしまいました。

一つは、自分は消費者でしかない自分、スーパーから物が消える、コンビニエンスストアからも商品が消える。自分がその日食べる物でさえ確保するのをどうしていこうかという状況であったりで、仲間たち、困っている人たちを助けようと言っても、自分の食べる物も無いのに助けられないでしょうという事で、自分は弱者であると気づいてしまいました。そこから東京を離れようと考え、その時はまだ明確な答えが出ず、いつ死ぬか分からない状態で自分の行き

たい場所、やりたいことをやってみようと色々な所へ行きました。沖縄でカフェを手伝ったり、沖縄の最南端の島でサトウキビ刈りをしたり、意外と肉体労働ではありますが、東京のシステムの中に依存しなくても体で食べていけるんだなと、居たい場所にいる事も可能なんだなと思うようになり、愛媛でミカン狩りを手伝ったりと、瀬戸内海を見ながらみんなでお昼を食べるというのも、東京に居る時はコンビニで弁当を買って自分の席でコンビニのご飯を食べていた時よりも、こっちの方が贅沢なのでは、と思うようになりました。瀬戸内海で親方が船を持っていたので、毎日海で魚を釣って、捌いて、お酒を飲んで、夜の時間も贅沢に優雅に過ごすと、何だか東京よりも優雅でないかと感じました。

その後、木登り上手なら山小屋で働かないかという事で、八ヶ岳にある赤岳と言う山の頂上山荘で山小屋の仕事をします。3000メートル級の高さで、常に雲海が目の下にあります。太陽が昇り、富士山がちょこんと見えて、これも贅沢だなと感じました。皆が一生懸命働いてお金を貯めてちょっとだけ休みを過ごす場所で、そのまま身を置いてそこで過ごし、そのまま食べていけるんだという事を体感いたしました。

そうこうしている内に、ベトナムで有機農業をしている日本人に出会いまして、この取り組みが過去にやっていた国際開発学にリンクしまして、ここから農業に興味を持ち、有機農業で人間が発展していく中で失ってしまう、壊してしまう部分を有機農業などの活動を通して、破壊せず発展していけるのではないかとという事でベトナム、東南アジアでやっていく事に意義を見出して活動をして参りました。ベトナムでも若者がお金を稼ごうと、それが成功だとホーチミンやハノイの方に農村から出て来て、給料が上がっていく事に目をギラギラさせて、ものすごく優秀な人達もいるのですが、そんな過程を辿って農村が廃れ、農村から人が居なくなったりで過疎化が進み、日本と同じ現象になっていくんだなと考えさせられるようになりました。

事業としてはその頃ソーシャルビジネスにもアンテナを張って、シンガポールの大学のソーシャルビジネスを研究している教授とコンタクトをとり、色々と模索して回っていました。

有機農業に興味を持ち始めてベトナムにいる時に父親が肺がんを患い、余命宣告１年と言わ

れまして、18歳で家を出て父親とも一緒に過ごす事も無かったので、１年間父親の面倒を見ようと日本に帰ってくる事にしました。日本で何が出来るかを考え、日本の生産者の現場へ行って話を聞いて、どう都会と繋ぐかなど、事業展開を目指して活動をして参りました。繋ぐのは良い事なのですが、自分の中途半端に気付きまして、移動中などはコンビニのご飯になっていたりと、生産者側でいる時には肉体労働で食べ物を作っていた時に自分がこの様な生活をしながら良くしていこうと考え、軸が完全に生産者側になってしまいいましたが、これが朱鞠内の師匠と出会った時の事でした。冬になると早く冬が終れと考えますが、冬があるから体も自由になりますし、山を歩くにも笹薮で普通登れない所も登れたりしますし、自分たちは色々な道具を使ったりして登れることを学ばせてもらいました。そうこうしている内に“自分でもそういう暮らしをして行こう”という事で、増毛町に辿り着きました。

増毛町に興味というか引かれる部分もあり、海があり山があり、その間に田んぼがあり、果樹園があり、山に行けば鹿がいるし、あらゆる食べ物、自分が必要とする食べ物が揃っている事が引かれる理由だと思います。増毛に着いてからは一次産業の現場で肉体労働など、体を動かしながら学んでいきました。そして“自分でもお米作りをしてみたい”と思い、家の裏にある荒れた土地を開墾して自分が食べる位の野菜

第19回　３月３日(水)　天候／晴

を作ったり、狩猟・採集で増毛の山々に何処に鹿がいるかとかに始まり、きのこや山菜なども採ったりと、自分の暮らしを豊かにして行く勉強をしていました。動物も烏骨鶏を飼って卵を孵化させたり、羊を貰ってきて飼ったり、犬を貰ってきて増毛の山を犬ぞりで走ってみたりしました。今まで学んできた事の延長線上を増毛で実践しました。

協力隊としての活動にも参加しましたし、休みの日には別苅の海岸線を南下してみたり、暑寒別岳で冬キャンプをしてみたり、また農業では、有機農業とか自然的な農業になりますが、私自身は暮らし全体をそういう方向に持って行けないかなと。そんな中で出来たキーワードがファーマカルチャーで、日本人としてはこの中で私一人でしたが、職業などのバックグランドもバラバラなのですが、勉強に行ったりもしました。世の中に同じような事を思って実践的にやろうとしている人達が居るんだという事に気づけたという事がここでの大きな収穫で、今現在は私も増毛町という所やってはいますが、世界中で同じことをやっている同志がいるという事がとても支えになっています。

世界を知るために世界に出て行った私ですが、今現在小さな町で小さな営みをしているのですが、かと言って世界から切り離されたかと言うとそうではなくて、増毛にいながら海外の人を連れて来たり、色々な体験に連れて行ったりとしています。漁業や林業もそうでですし、畑の田んぼもそうですし、逆に海外の人はこのような体験が面白いと感じています。ド田舎ですが来てくれます。たまたまインドで出会った友達が日本に来るとの事で、本来は東京止まりだったのですが増毛まで来てくれて、おそらく増毛に来たインド人は初めてではないかと思いますが、彼らもスキーはやった事がなかったので連れだしてスキーを体験させてみたりしました。トマト農家へ連れて行ったり、ウニむきを外国人に体験させたりと、本来であれば日本海のオロロンラインには外国人も通りかかりますが、コンビニで弁当を買ったりご飯を食べる位で、泊まる事はありませんが、たまたま知り合いになった外国人と交流をして泊めたりしています。私が増毛でイベントを企画したものですが、日本のイベントに外国人が参加するする事はありますが、外国人が日本の文化に合わせる形になりますので、逆に外国人主体のイベントを開いて、そこに地元の人と交流する場を設ける事で、海外の人達も田舎で交流するパーティーも無いものですから楽しんでもらっています。増毛の吉田屋という所なんですが、ドアを開けると海外に行った感じで、増毛で海外旅行の感覚が楽しめます。バーのカウンターがあって、そこでは英語で飲み物を頼むような、海外で店に入った様な感覚になります。外国人の方には次の日にまつくらにてお寿司を食べて打ち上げをしてもらい、お互いに交流をもって楽しみます。

スティーブ・ジョブズも言っていますが、「コネクティング・ザ・ドッツ」という事は、過去にやってきた物、色々なアンテナが繋がっていくんだという事で世界が繋がっている、経験が繋がっているという事もあるのですが、広い世界を自分から見ようと思って自分から外に行こうとしていた流れに、逆に俯瞰的な所から小さい所に降りてきたのですが、逆に小さい営みという物が世界に繋がって行くという事を感じさせられました。外に目を向ける事もそうですが、逆に内に目を向ける事によって繋がって行くという事も分かりました。朱鞠内の師匠の所で、有機農業でウーフーというプログラムでボランティアの人を受け入れていますが、それこそ増毛よりも僻地な所で交通機関も何もない所で外国人を受け入れるよと発信すると、次から次へと海外からやってきて、面白い事をしていると楽しい事をやっていると、距離なんか関係なくその人に会いに行く事が出来ています。ここに出て来る人々もマイクロソフトで働く人たちで、色々なアンテナを張っている人たちで、とても面白い現象です。

私も女ひとりで農業をやっていく事をみんな無理だろうと言われましたが、私的には色々な仲間とやって行きたいとの思いから、予定・計画性は無いのですが、色んな人が手伝ってくれて一緒に愛情を注いでお米を作ってきました。私は今までの流れから、ただお米を作って出荷してお金を稼いで終りというのを目指しているのではなくて、色々な物と繋がっていくための農業で、自分が食べていく物でもありますし、仲間たちにも食べさせていく場でもありますし、一緒に作って、繋がって行く場所でもあります。豊かさとは何か？とずっと考えてきた事で、実は子供たちに言ってきた事なのですが、資本主

義経済の資本。資本として色々な見方が出来ますが、地方にはたくさんの資本が存在します。お金だけで考えればそんなに稼げないでしょうと言われますが、体験という豊かさがあるから、内面的な豊かさを増やしていき、豊かさの概念という物を共有していくと地方の暮らしも可視化されてくるのではと思います。私自身、初めは国際的に上の方から物事を考え海外へ出ていきましたが、今は一個人の暮らしから一つの解決策を見い出し、それを追求し実現していく事を目指しています。自然に囲まれた所には人間が主体ではなくて、自然があるからこそ豊かさを享受できる場所だと理解しています。

昔はグローバルと言う考えでありましたが、今はローカルをベースに頭の中が構成されています。色々な言葉が出てきますが、要するにこの地に住む一人ひとりが豊かにやっていこうと考え、手を取り合える所は手を取り合って、連携しながらサポートしながらやって行こうと思います。今年は１年目ですが思ったより収穫がありまして、自由に動けるなということで、面白い活動をしました。それは全道を回り、各地にアイスドームを作っていく事で、元々は層雲峡の氷瀑祭りや支笏湖の氷濤祭り、何かを発案した、本日一緒に例会にお邪魔した、竹中ヒロさんの芸術家のお父さんでした。この方の息子さんが今までは大きなイベントで氷の造形物を作成していたのですが、コロナの関係でイベントが出来ないという事もあり、より小さなスケールでやろうという事で色んなお宅へお邪魔して、ベランダから見える場所へアイスドームを作ってみようなどと、各地を回ってきました。

最後に学生さんたちによく言うのですが、一人ひとりの営みが繋がって行く事が、自分が世界を変える人間になれるという事を実感して生きて行こうという事で、もはや安定さえどうなるか分からない世の中なので、何が良くてどうしたいかを考え、変化を求めるのではなくて、あなた自身が変化になりなさいという事で、本日の卓話を締めくくりたいと思います。本日はお招きいただきありがとうございました。

プログラム　（第20号・第21号）合併号

●本日
「PETS報告会」
会長エレクト　高橋　理佳 会員

●次週予定
－法定休会－

会員誕生日
渡　邊　裕　久
角　　隆　巨

配偶者誕生日
小　原　恵美子

結婚記念日
青　山　貴　幸

No. 2886
第21回　3月24日

出席報告

前例会

会員総数	26名
出免会員	３名
出免出席	２名
基準会員出席	13名
出席率	60.00%

前々会　第19回　３月３日

欠席会員	７名
内メイクアップ	０名
修正出席率	73.08%

例会／毎週水曜　12:15～13:15　留萌産業会館2F

幹事報告

- 羽幌ロータリークラブより２月会報と３月例会案内を受領しました。
- 深川、妹背牛ロータリークラブより３月例会案内を受領しました。
- 砂川ロータリークラブより11月と２月の会報を受領しました。

ニコニコBOX

- 木村様、ようこそ留萌ロータリークラブへおいで下さいました。本日はよろしくお願い致します。　辻元会長
- 木村様、本日はよろしくお願いします。　燕幹事
- 木村様、今日はおいでいただきありがとうございます。楽しみにしておりました。　福士直前会長

第20回　３月10日（水）　天候／晴

- 米山功労賞をいただきました。　串橋副会長
- 木村様、本日はお越しいただきありがとうございます。　森会員
- 木村様、ようこそ留萌ロータリークラブへ本日の卓話よろしくお願い致します。　関野会員
- 母の葬儀の際大変お世話になりました。　中出会員

前　回	371,000円
今　回	39,000円
累　計	410,000円

プログラム

来賓卓話「職業奉仕と見返りを求めない寄付」

（宗）日本聖公会 北海道区
司祭（牧師）留萌キリスト教会
木村　夕子 様

始めに

本日はお招きありがとうございます。この１年の間、COVID－19の影響下でまとまった人数の方々を前にする機会がなかったのでとても緊張を感じています。原稿を用意しながら自宅にいる段階ですでに脈拍が早くなっていまして、心理学のつり橋効果をご存知ですか？ 高さがあって揺れるつり橋をドキドキしながら渡ると、向こうからやってくる見知らぬ人に対して恋心を抱いたと錯覚してしまうあれです。ロータリーでどんな話をしようかと考えて妙にドキドキしていたら、あれ私ロータリークラブの事好きなのか？と不思議な感覚になりまして、どうもすみません私はとても単純な性質なのでどうか今日は気もちを楽にしてお付き合いいただければと思います。

本日のテーマである「奉仕」や「寄付」という言葉はとても教会的な言葉です。教会の外ではめったに聞くことのない言葉だと思っていましたから、森幹雄さんから今回の講話の依頼を受けた時に奉仕と寄付について聞きたいのだと伺いまして、私はおどろいたわけです。教会以外に奉仕や寄付について真面目に考えている人たちがおられると知って感動を覚えました。そして、文明の利器であるスマホやＰＣでロータリークラブをググってみました。おおよその様子をざっくりと拝見した第一印象は、教会から宗教の殻を奇麗にむいた姿だなと思いました。宗教の殻を破って出てきた新たな運動体。ここには宗教の壁がないので、全世界とつながる可能性を持っている所に大きな希望があるんだと思います。ではそろそろ、少し真面目な話に入って行こうと思います。

① 職業奉仕

この言葉はロータリークラブ固有の言葉で、職業と奉仕をつなげた造語だと考えます。

国語辞典による「奉仕」の説明

⑴　神仏・主君・師などに、つつしんでつかえること。「神に奉仕する」
⑵　利害を離れて国家や社会などのために尽くすこと。「社会に奉仕する」
⑶　商人が品物を安く売ること。「特価で御奉仕しております」「奉仕品」

キリスト教会の牧師が実践する「奉仕と」は、上記の⑴神への奉仕と⑵人々への奉仕です。神への奉仕と、人への奉仕とは具体的に何かというと、第一には礼拝祭儀を執り行うこと、第二に聖書の言葉を学び伝えることを通して神と人のために働いています。

礼拝祭儀には、人から神へ、神から人への双方向の交流があります。

• 人⇒神

神に向けて忠誠と献身を表明する人間から神への捧げものとしての側面があります。熱心な信者は毎週日曜日の礼拝に欠かさず出席します。日曜日以外にも礼拝を行うべき日、例えば殉教した聖人の記念日などにも可能な限り出席する信徒もおります。信徒にとって、礼拝に出席することは神と共に生きることの表現です。仲間に会うことが楽しみで参加する人も居ますけれども、親しくできる人との出会いや交流もまた神からのお恵みですから大変結構なことだと思います。そして牧師の立場から感じることは、礼拝参加自体が神への尊い捧げものになっているという事です。人の一生という限られた命の時間を神のために使うのは、神に命を捧げているのと同じことです。神への捧げものの最も尊い所を礼拝に来る方々の姿に見せていただいています。

もう一つ、人から神へ捧げている者があります。それは祈りです。家内安全商売繁盛だけでなく、世界中の出来事（自然災害・政情不安・紛争・難民・温暖化・人権問題など）に関心を持って知る努力をします。そして、苦しみを背負っている人々を思い、辛い現状からの解決を祈っています。実は昨年の秋に私の祖母は96歳で逝去しました。足を骨折してリハビリ病院に入院していたので、コロナ禍になってからは面会が思うように出来ずにいた時に、いよいよ時が迫っていると知らされました。このまま会えずに別れるのかと思い、悲しい状況をＳＮＳに投降したら沢山の人が「祈っています」とメッセージを寄せてくれました。不思議と孤独な寂しさが和らぎました。祖母のために祈ってくれているだけなのに、私の気持ちが和らぐのです。わかってくれている人がいる、応援してくれる人がいる、それだけで人の気持ちが和らいで元気が出るのです。祈るというのは、やみくもに願い事を言い放つ行為ではなくて、苦しい現状に想いを寄せて神様に向けて伝えるということだと思います。人から神への方向性です。感謝を捧げる祈りもあれば、あまりにも悲惨な世界を嘆く祈りもあります。けれども、祈りは決して空に消え去ることはないという事を一つ覚えていてほしいと思います。

• 神⇒人

では次に、礼拝祭儀において神から人への賜物についてお話しします。カトリックではミサと呼ぶ儀式で、聖公会では聖餐式と呼んでいます。パンと葡萄酒を用いる儀式です。キリストの十字架上での犠牲を記念してパンをキリストの体、葡萄酒をキリストの新しい契約の血の象徴として用いて行います。神学的な意味を解説すると時間切れになるので、涙をこらえてはしょります。

ここで皆さんに質問です。急に難しい質問を投げかけます。誰にもマイクを向けませんのでご安心ください。自分なりの考えを少し巡らせてください。皆さんにとって、これは神様のお恵みに間違いないと言い切れる物事はありますか？それは一体何でしょう？　教会では、神の恵みであることを保証して行っていることが２つあります。一つは今お話しした聖餐式、パン

と葡萄酒の儀式です。教会はこのパンと葡萄酒を神の御恵みであることが間違いないと保証しています。もう一つは、洗礼式です。これは一人の人が一生に一度きり受けられる神の御恵みであると教会が保証しているものです。それほどに尊いものです。洗礼と聖餐は神からの御恵みで間違いありません。この２つは教会に初めて来た人がすぐに受け取ることは残念ながらできません。必要な事柄を勉強して、敬虔な気持ちで大切に恵みを受け取ることが出来るように時間をかけます。私がみっちりと、いえ、優しくご指導いたします。(笑)

それなら、初めて教会に行く人や信者はない人は、礼拝で御恵みは何ももらえないのかと心配かもしれません。いえいえ、大丈夫です。牧師が話す聖書の言葉に基づいたメッセージ、これは任命された牧師が担う奉仕の業なので、牧師はもちろんとても大切に準備して丁寧に神からのメッセージを届ける努力をしていますし、信徒たちもかなりの集中力をもって良く聞いて共に神の恵みに与ろうとして受け取っています。牧師はこれを御言葉（みことば）に仕えると言います。聖書の一番初めに、私たちが生きている地球やこの宇宙全体は神の言葉によって創造された被造物であるという思想が書かれています。キリスト教の神学を英語でセオロジー（Theology）と言いますが、ギリシャ語で神の（Theou）言葉（Logos）という語源を持ちます。神の言葉を聴いて、助けを必要とする人々に神の言葉をよくわかるように伝えて道を示すのが牧師の任務です。

さて、ここまでかなり大雑把ではありますけれども、牧師が神と人々に奉仕をする上での基

第20回　３月10日（水）　天候／晴

本のキをお話ししました。礼拝祭儀の中で、私は神さまと礼拝会衆の間で双方の交流の仲介役を担っていると言っても良いと思います。少しだけ私の背景について申し上げますと、私はクリスチャンの両親のもとに生れて、生後半年くらいの時に洗礼を授けられておりまして、自分の人生の選択としての洗礼ではなかったので、思春期には反発を感じたものです。親に反発を感じていた時代はバブル期まっただ中で、私は世の中の浮かれた雰囲気をやや冷めた目で見ていたのを覚えています。大量に消費される流行を追うことに私は興味が持てませんでした。流れ去って消えてしまうような虚しいものにではなく、大事にされて価値を持つものに自分の全部を使えたら良いなとぼんやりと考えていました。ものを造る職人にもあこがれを持っていました。まあ、様々な出会いとドラマが山ほどありまして、神と人々に仕えるという尊い生き方を歩む決心をして今に至ります。まあ、かっこよく言うと私は自分の人生をまるごと神に捧げたという訳です。

② 見返りを求めない寄付

教会ではいつも献金をします。英語ではOffering提供するという行為です。教会の献金は、礼拝で神に捧げるもので、原始的には動物の犠牲でした。キリストの十字架の血が、人類の究極の贖いの血となる神との新しい契約であり、もう礼拝には生贄が必要とされません。それでも捧げものをするのは、神への感謝を表す行為であると同時に、困難を抱えている人たちへの支えとして分かち合うために用いられる性質を持つものであるのも大きな理由です。キリスト教の礼拝の献金は、現代で言う富の再分配、多く持っている人が少なく持っている人と分かち合うことの始まりであったと言えます。

旧約聖書の礼拝祭儀で捧げられていた動物の生贄には厳格な規定がありまして、最高級の捧げものである牛は１歳の雄で傷が一切ない最も良いものを捧げるとされています。神への捧げものは決して粗末で自分にとって必要のない余った部分であってはならず、最良のものを取り分けて選りすぐりを捧げる姿勢には学ぶところがあると思います。

今日考えたい寄付とは、これは英語で言うとCharityですね。チャリティーは慈善行為であり、見返りを求めないというのが大前提だと思っていました。所が、近年人気のある「ふるさと納税」は見返りがばっちりとあって、むしろ見返りを求めない方が不思議だと言わんばかりの制度に見えますね。国際ＮＧＯや国内のＮＧＯ、ＮＰＯに寄付をすると、税控除の対象になりますとアピールする団体が主流になりました。寄付の動機が節税への期待が先立っていたとしても、結果として寄付が増して慈善活動が活発になれば両者に益があると言えるのかなと考えます。

見返りを求めて行う寄付がどのようなものか考えると、聖書に面白いたとえ話があるので紹介します。

◆やもめの献金
イエスは賽銭箱の向かいに座って、群衆がそれに金を入れる様子を見ておられた。大勢の金持ちがたくさん入れていた。ところが、一人の貧しいやもめが来て、レプトン銅貨二枚、すなわち一クァドランスを入れた。イエスは、弟子たちを呼び寄せて言われた。「はっきり言っておく。この貧しいやもめは、賽銭箱に入れている人の中で、だれよりもたくさん入れた。皆は有り余る中から入れたが、この人は、乏しい中から自分の持っている物をすべて、生活費を全部入れたからである。」

ある研究者によると、当時の神殿に置かれた賽銭箱には蓄音機のラッパに似た部分が上むきに付けられていて、献金のコインを入れると派手な音が鳴ったそうです。そうすると金持ちはこぞってコインをどんどん入れて、羨望の眼差しを欲しいがままに浴びたのだろうと考えられるようです。一方、レプトン銅貨というのはとても小さな値のコインであり、人が１日生きるためのギリギリの金額だと言われています。

聖書をもう一つ紹介します

◆金持ちの男
イエスが旅に出ようとされると、ある人が走り寄って、ひざまずいて尋ねた。「善い先生、永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいで

しょうか。」イエスは言われた。「なぜ、わたしを『善い』と言うのか。神おひとりのほかに、善い者はだれもいない。『殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、奪い取るな、父母を敬え』という掟をあなたは知っているはずだ。」すると彼は、「先生、そういうことはみな、子供の時から守ってきました」と言った。イエスは彼を見つめ、慈しんで言われた。「あなたに欠けているものが一つある。行って持っている物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい。」その人はこの言葉に気を落とし、悲しみながら立ち去った。たくさんの財産を持っていたからである。イエスは弟子たちを見回して言われた。「財産のある者が神の国に入るのは、なんと難しいことか。」弟子たちはこの言葉を聞いて驚いた。イエスは更に言葉を続けられた。「子たちよ、神の国に入るのは、なんと難しいことか。金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい。」弟子たちはますます驚いて、「それでは、だれが救われるのだろうか」と互いに言った。イエスは彼らを見つめて言われた。「人間にできることではないが、神にはできる。神は何でもできるからだ。」

どうですか皆さん、この話は衝撃ですよね。金持ちが神の国に入るよりもラクダが針の穴を通る方がまだ易しいって、どうですか？この世の道理では不可能だと言っているんですよ。けれども私はこのように考えます。キリストのこの言葉を真正面から真剣に考えた人が、慈善活動や寄付活動を始めたのではないかと。悲しんで帰ることしか出来なかった人と同じように悲しみを感じる資産家のキリスト教徒はたくさんいるわけです。その人が営む資産運用で雇われている人も存在しているのだとしたら、資産家の事業で雇用されている人が居ればいるほど、一切を売り払うことは到底現実的ではありません。

カトリック教会の逸話の一つに次のような話を聞いたことがあります。神父様が教会の礼拝で上に紹介した聖書のメッセージを話したら、教会員の一人が本当に自分の家を売って代金を持ってきたそうです。驚いた神父は、急いでその家を買い戻して持ち主に返して言いました。「あなたの捧げものは確かに受け取りました。これからはここを神の家として、あなたが管理してください。どんな家を神がお喜びになるかを考えてよく尽くしてください。」

神に自らを捧げる生き方とは、たとえばこのようなことなのだと思います。「神にはできる」この言葉を信じて自分の持ち物をあたかも神からの預かりものと考えて、神が喜ばれるように管理する。自分の持ち物が、誰かの役に立つならば惜しまずに分かち合うのです。全部あげるのとちょっと違います。持ち物をすっからかんにする必要はないでしょう。これからも忠実に分かち合いながら生きて行こうとするなら、きっと神様の祝福をいただいて、地域社会、世界が、自分も家族も全部が今より明日、明日より１年後がより良くなっていくはずです。

以上で本日の講話は終了です。

ロータリーとは

ロータリーの誕生とその成長

20 世紀初頭のシカゴの街は、著しい社会経済の発展の陰で、商業道徳の欠如が目につくようになっていました。

ちょうどそのころ、ここに事務所を構えていた青年弁護士ポール・ハリスはこの風潮に堪えかね、友人３人と語らって、お互いに信頼のできる公正な取引をし、仕事上の付き合いがそのまま親友関係にまで発展するような仲間を増やしたい、という趣旨でロータリークラブという会合を考えました。ロータリーとは集会を各自の事務所持ち回りで順番に開くことから名付けられたものです。

こうして 1905 年２月 23 日にシカゴロータリークラブが誕生しました。

それからは、志を同じくするクラブが、つぎつぎ各地に生まれて、国境を超え、今では 200 以上の国と地域に広がり、クラブ数 36,426、会員総数 1,178,107 人（2021 年１月 18 日ＲＩ公式発表）に達しています。

そして、これら世界中のクラブの連合体を国際ロータリーと称します。

このように、歴史的に見ても、ロータリーとは職業倫理を重んずる実業人、専門職業人の集まりなのです。その組織が地球の隅々にまで拡大するにつれて、ロータリーは世界に眼を開いて、幅広い奉仕活動を求められるようになり、現在は多方面にわたって多大の貢献をしています。

日本のロータリー

わが国最初のロータリークラブは、1920（大正９）年 10 月 20 日に創立された東京ロータリークラブで、翌 1921 年４月１日に、世界で 855 番目のクラブとして、国際ロータリーに加盟が承認されました。

日本でのロータリークラブ設立については、ポール・ハリスの片腕としてロータリーの組織をつくり、海外拡大に情熱的に取り組んだ初代事務総長チェスリー・ペリーと、創立の準備に奔走した米山梅吉、福島喜三次などの先達の功を忘れることができません。

その後、日本のロータリーは、第２次世界大戦の波に洗われて、1940 年に国際ロータリーから脱退します。戦後 1949 年３月になって、再び復帰加盟しますが、この時、復帰に尽力してくれたのが国際ロータリーの第３代事務総長ジョージ・ミーンズでした。

その後の日本におけるロータリーの拡大発展は目覚ましいものがあります。ロータリー財団への貢献も抜群で、今や国際ロータリーにおける日本の地位は不動のものになりました。現在、日本全体でのクラブ数は 2,237、会員数 86,176 人（2020 年 12 月末現在）となっています。

2020 － 21 年度 ＲＩテーマ

ロータリーは機会の扉を開く

Rotary Opens Opportunities

ロータリーの目的

ロータリーの目的は、意義ある事業の基礎として奉仕の理念を奨励し、これを育むことにある。具体的には、次の各項を奨励することにある：

第１　知り合いを広めることによって奉仕の機会とすること；

第２　職業上の高い倫理基準を保ち、役立つ仕事はすべて価値あるものと認識し、社会に奉仕する機会としてロータリアン各自の職業を高潔なものにすること；

第３　ロータリアン一人一人が、個人として、また事業および社会生活において、日々、奉仕の理念を実践すること；

第４　奉仕の理念で結ばれた職業人が、世界的ネットワークを通じて、国際理解、親善、平和を推進すること。

四つのテスト

言行はこれに照らしてから

1．真実か　どうか
2．みんなに公平か
3．好意と友情を深めるか
4．みんなのためになるか　どうか